多文化にふれる　えほんのひろば

NPO法人おおさかこども多文化センター

おおさかこども多文化センター、通称オコタックの村上です。私たちは、外国にルーツを持つ子どもの包括的教育支援をしているNPO法人です。今回の発表は、オコタックの様々な活動の中で、絵本を使った活動として【多文化にふれる　えほんのひろば】を紹介いたします。

そもそも、この【多文化にふれる　えほんのひろば】をすることを考えたきっかけは、オコタックのNPO活動が始まった2011年頃には、絵本展や絵本の読み聞かせなど楽しい絵本のイベントは沢山ありましたが、どの絵本のイベント会場に行っても、外国人家族は参加していませんでした。楽しい絵本の活動プログラムに、日本に住む外国人の子どもも参加してほしいと思ったのが始まりでした。

外国人も参加できるように、様々な工夫と仕掛けをした【多文化にふれる　えほんのひろば】を2012年に初めて、大阪市立中央図書館の協力を得て実施することができました。　それから、コロナ感染で集客を要する活動ができなくなるまでの2019年まで大阪市立中央図書館で2日間連続の

【多文化にふれる　えほんのひろば】を行ってきました。

その活動記録を動画にしてありますので、ご覧ください。

“絵本を通して多文化に出会う”場づくり

～多文化にふれる　えほんのひろば　2012～2016 の記録から～

NPO 法人おおさかこども多文化センターでは、大阪市立中央図書館のご協力のもと、2012 年度からの 5 年間、“多文化にふれる　えほんのひろば”を開催してきました。

日本の絵本と外国の絵本と合わせて約 750 冊をずらりと展示、自由に選んでもらえるイベントです。展示した外国語絵本は市立図書館所蔵のものを中心に、在阪の外国人から寄贈いただいたものを含め、20 数言語にのぼります。中には複数の言語で対訳本が出ている作品もあります。

“多文化にふれる　えほんのひろば”では、毎回、多言語のおはなし会をしています。

いつものよく知っているお話も外国語で聴くと新鮮です。子どもも思わず前に出てみんなとても楽しそうです。

一冊の絵本をはさんで外国語の読み手と日本人の参加者がそれぞれの言語で掛け合いで読んでいきます。ドキッとか、ホッとか気持ちを表す音が、言語によって違って、とても面白いです。

多言語のおはなし会では、おとなだけではなく、子どもも読み手として活躍してくれます。母語で堂々と朗読したり、ママが外国語で読んだお話に日本語の要約をつけてくれたり、いつも大きな拍手が巻き起こります。

図書館には複数の言語で対訳が出ている絵本もたくさん。多言語での読み聞かせは、外国から来たお友達も一緒に、同じお話が楽しめます。

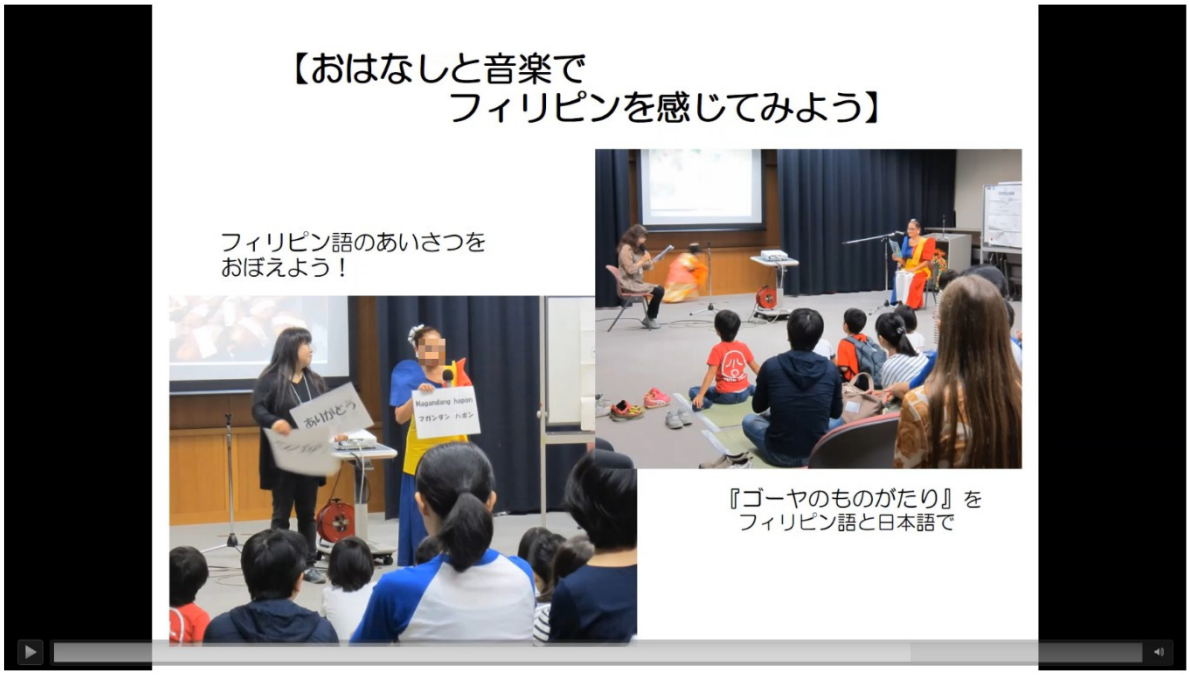
中国語で「うんとこしょ　どっこいしょ」は、「ヘイヨー、ヘイヨー」、ロシア語では何て言うんでしょう。

タイ文字、ハングル、ビルマ文字、ロシア語のキリル文字、ネパールやインドのデーヴァナーガリ文字で、いろんな国の文字でオリジナルの名刺を作りました。

大阪府内の小中高校に通う外国ルーツの子どもの母語の数は 35 言語に上ります。それら全ての言葉で「こんにちは」と「ありがとう」を書いた木の実のタペストリーは、さまざまな交流活動に使えます。

大阪在住のペルー人たちで作っているグループ、グループナスカを招いて、物語やダンスでペルーの文化に触れることができるプログラムを実施しました。素晴らしい踊りを見せてくれたのはペル

ーにルーツを持つ小学生の女の子です。



関西に住むフィリピン人たちで結成されたフィリピンダンスカンパニーのみなさんとともに、フィリピンで人気の絵本をフィリピン語と日本語で読み聞かせ。

えほんのひろばでは、外国人スタッフによる母国のおすすめ絵本を紹介するポスターを作っています。日本語版があるものは、並べて展示することで、素敵な絵本をたくさんの方に手に取ってもら

えました。また、会場の外国人スタッフに直接、生の声で読んでもらうこともできました。絵本には、国境がありません。

外国ルーツの子どもたちが母語や母文化に誇りをもって、いきいきと自分らしく、活躍できるように、

“絵本を通して多文化に出会う”場を、みんなでつくっていきませんか？

この活動を通じて、いろんな事に気が付きました。　動画でも説明がありましたが、外国にルーツを持つ子どもたちも絵本の読み手や、自分の母語の文字を使った名刺つくりに参加してもらったのですが、みんな、とても生き生きと誇らしげに、自分の母語で絵本を読んだり、文字を教えてあげたりしていました。　また、日本の子どもたちが、知らない外国語での絵本のお話しを、とても真剣に絵と音を楽しんでいるように聞いていました。これは絵の力だと思います。子どもは、絵を見ながら、自分なりの自由な発想で絵本の世界に入っているのだと感じました。大人が絵本を読む場合は、まず、ストーリーが気になり頭で読んでいると思いますが、子どもは、ストーリーより、絵であったり、読み手の顔や声や音であったり、絵本を心で、五感で楽しんでいるのではと感じました。

私は、多言語の絵本のお話し会を通じて、世界には、いろんな言語とお話・文化があり、それはその国の人にとって大切なものだということを日本の子どもに知ってほしいのです。また、外国から来て日本に住んでいる人は、自分の母語と母文化はとても大切なものであることに自信をもってほしいと思っています。

この動画に出てきた小学 4 年生のペルーの男の子が、感想を書いてくれたのを読みます。ぼくは「多言語おはなし会」で、日本の絵本のスペイン語版を読みました。もともとは、お母さんがスペイン語での読み聞かせを頼まれていたのですが、練習しているお母さんを見ていると、自分でも読みたくなってきて、ぼくも 1 冊読んでみることにしました。 家で、お父さんとお母さんといっしょに練習をしました。 本番は、大勢のお客さんの前で、スペイン語で読むのは初めてで、最初は

緊張したけど、 みんながぼくのスペイン語を真剣に聞いてくれて、拍手をしてくれたのが、とてもうれ しかったです。

動画で紹介されていた、いろんな言語で手作りの名刺をつくるプログラムがあるのですが、そのプログラムに参加してくれた日本人親子が、「私も知らない言語の文字を書くことは大変難しいということは、日本の学校に通っている海外から来た子どもは、私が感じたように、難しいと思いながら、学校で、日本語を学んでいるのね！　」と気が付いてくれた親子が少なくないです。

コロナ禍で、集客を要する大阪市立中央図書館での【多文化にふれる　えほんのひろば】はできなかったのですが、今年の夏に、大阪では有名な阪急デパートのイベントホールで行われた NPO フェスティバルに参加しました。ホールに絵本の活動を紹介するブースを設置して、多言語の絵本と日本語だけどテーマが多文化的な絵本を並べ、自由に絵本を手に取って読んでもらえるようにしました。 【きんぎょがにげた】を日本語版以外に韓国語と中国語を並べていると、子どもが見つけて、あっ！この本日本語ではないと気付いてくれました。すると親がこれは、中国語で書かれているねえ！　子どもは、自分のクラスにも中国語から来た友達がいるから、中国語の絵本があることを教えてあげようと言った会話が聞こえてきたのが嬉しかったです。

今日の蓮岡さんのお話しに出てきた、【せかいいちうつくしいぼくの村】も並べました。

ブースの周りの椅子に座って、真剣に、この本を読んでいる小学校高学年の子どもがいました。

宝塚大劇場に行かれたことがある方は、ご存じですが、大階段の舞台が有名です。その大階段を真似したイベントステージが、この阪急のイベントホールにあります。そこで、絵本の多言語のお話し会をしました。

ロシアの昔話【おおきなかぶ】を在住ロシア人の方にロシア語で、読んでもらいました。

そして、中国語で【はらぺこあおむし】そして、【うしはどこでもモー】を日本語で読んで、本にでてくる動物の鳴き声を、大阪府立高校に学ぶ外国にルーツのある生徒たちや留学生に、中国語、ミャンマー語、韓国語、タイ語、ロシア語、ネパール語のそれぞれの言語で鳴き声を紹介してもらいました。　会場にいる参加者、見学者一同世界の鳴き声を楽しみました。

また、このイベントステージで、フィリピンのバンブーダンスを大阪在住のフィリピン人グループ

に踊ってもらいました。　見学者も一緒にバンブーダンスに挑戦してくれて、会場みんなで楽しみました。

阪急デパートでの【多文化にふれる　えほん】のひろばの経験からヒントを得て、図書館以外で、多言語のお話し会や文化交流をすることを思いつきました。　交通の便の良い素敵なカフェを見つけたので、多文化にふれる絵本＠カフェと名付けてチラシのような絵本のイベントを初めてしました。参加費代わりに、飲み物やお菓子を注文してもらいました。

在住の中国の親子に中国語の絵本を読んでもらったり、二胡の演奏をしてもらいました。

同じく大阪在住のタイの人には、自作のタイのお話しの紙芝居を日本語で紹介してもらいました。

また、文化紹介として、タイ文字の書き方や、タイの踊りの手の動かし方を教えてもらい、参加者も一緒に踊ってみました。　とても、アットホームな雰囲気で、絵本を通じて文化交流できたことで、新たな多文化交流活動を見つけました。

今後の私たちの絵本の活動を図書館だけに限らず、いろんな場所で、やってみることを計画中です。たとえば、住宅展示場とか、家族が集まるイベント会場とか・・・、考え中です。　図書館や学校で行う多言語の絵本のお話し会とは違った気づきや多文化交流の広がりが期待できると感じています。